若越郷土研究

8の5

道守荘遺跡のうち総合グラウンド予定地の発掘調査の概要

杉原丈夫

一

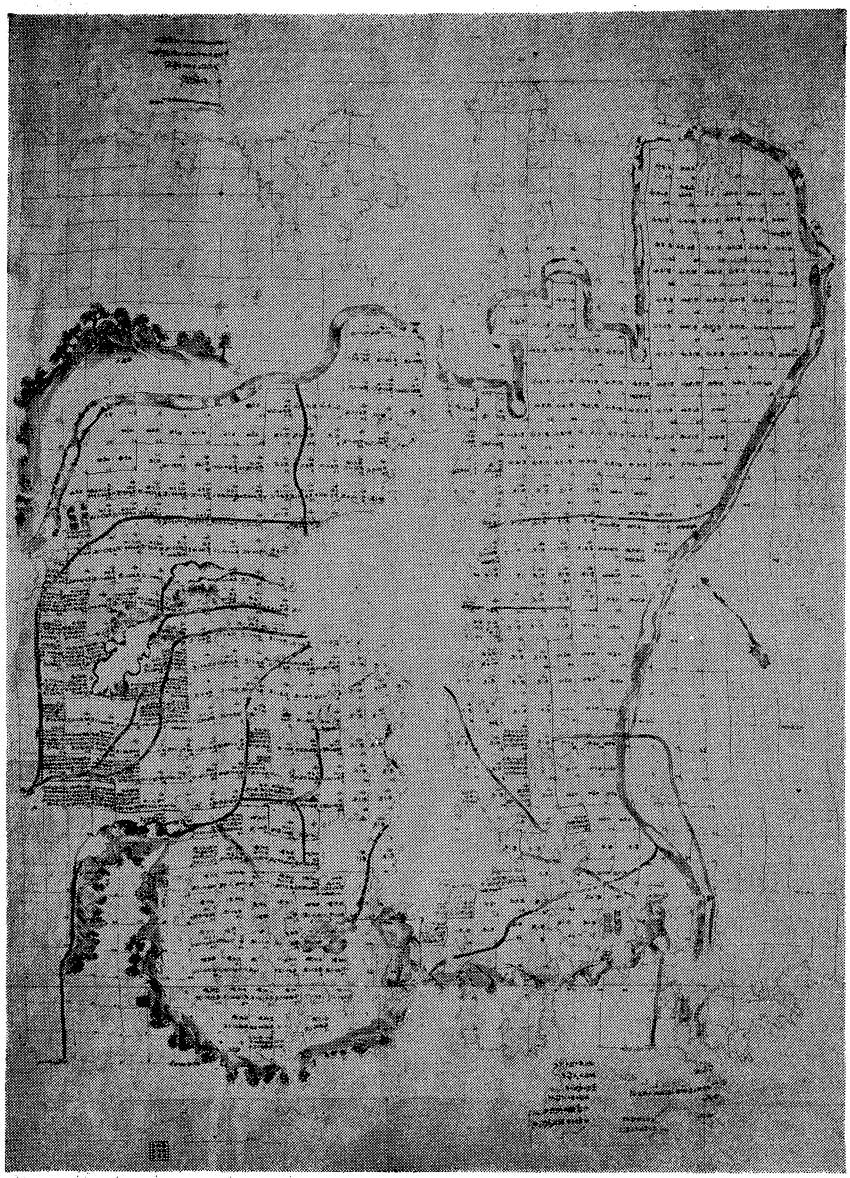
越前国道守(ちもり)荘遺跡のうち県営総合グラウンド建設予定地の発掘調査については、和島誠一氏が史学雑誌に専門的報告書を執筆することになつている。ここでは調査の概要を専門的にならない範囲で報告しておく。

私たちが県営グラウンドの建設について知つたのは昭和三十七年八月下旬であつた。ちようどそのころ福井市役所が遊園地造成のため兎越(うさごえ)山および八幡(はちまん)山の古墳群を自衛隊のブルドーザーで破壊しようとしているときで、私と影山剛氏とが市当局に抗議して、破壊の前に応急的に調査することになつていた。調査といつても私たち自身考古学者でない上、時日が迫つていて、とても学術的調査などできないので、ともかく出土品だけ拾い上げておこうという腹であつた。ところが偶然の事ともいうべきであろうか、市の社会教育課勤務の沼弘氏は考古学専攻の方であることがわかつたから、沼氏に全面的な協力をお願いし、郷土の考古学の大先輩斎藤優氏の指導のもとに、学生アルバイトを使つて、目ぼしい古墳の粗掘を始めた。(このときの出土品は市の郷土歴史館に保管してある。その詳細については市歴史館が報告するであろう。)

この兎越山の作業中私たちは、兎越山のすぐ下に見える道守荘遺跡の一部が総合グラウンドになることを斉藤優氏に聞いた。私たちは驚いて県の総合開発室を訪ねて、その真偽を確認した上、福井大学関係者杉原丈夫、影山剛、塚野善蔵、大西青二の連名で、知事および教育長に陳情して、工事の延期および工事前の調査を要求した。一方私たちは中央にも働かけ、文部省、文化財保護委員会、日本考古学会に援助を要請した。これに応じ日本考古学会からも和島誠一氏が来福して、県当局に遺跡を尊重すべきことを説得した。その結果、県から八十万円(後に二十万円追加された。)、文部省から六十万円、計百四十万円(後に計百六十万円)の経費で調査に着手できる見通しがついた。

調査の規模が大きい上、学術的価値も高いので、私たちは次のような調査団を編成した。

団長	長谷川万吉	福井大学長	
調査委員			
(氏名)		(専攻)	(大学)
	宝月　圭吾	歴史学	東京大
	井上　光貞	〃	〃
	斎藤　忠	考古学	〃
	和歌森太郎	歴史学	東京教育大
	和島　誠一	考古学	資源研
	弥永　貞三	歴史学	名古屋大
	井関弥太郎	地理学	〃
	岸　俊男	歴史学	京都大
	塚野　善蔵	地学	福井大
	笹島　貞雄	〃	〃
	三浦　静	〃	〃



第一図　道守荘開田図

大西　青二　地理学　〃
吉川　文次　〃　歴史学　〃
重松　明久　〃　考古学　県
斎藤　優

発掘員

和島　誠一（調査委員兼務）
岡田　清子
岡田　隆夫　東京大学大学院
森　昭
原　秀三郎　京都大学大学院
沼　弘　福井市社会教育課

幹事

杉原　丈夫　福井大学
影山　剛　福井大学

上記二名のほか福井大学事務局長をはじめ関係官庁の課長等にお願いして幹事に加わってもらった。また次の方には調査団の事務に特に尽力してもらった。

宮川利代蔵　福井大学付属図書館
野村　学　福井大学会計課
海貝　茂　福井県社会教育課

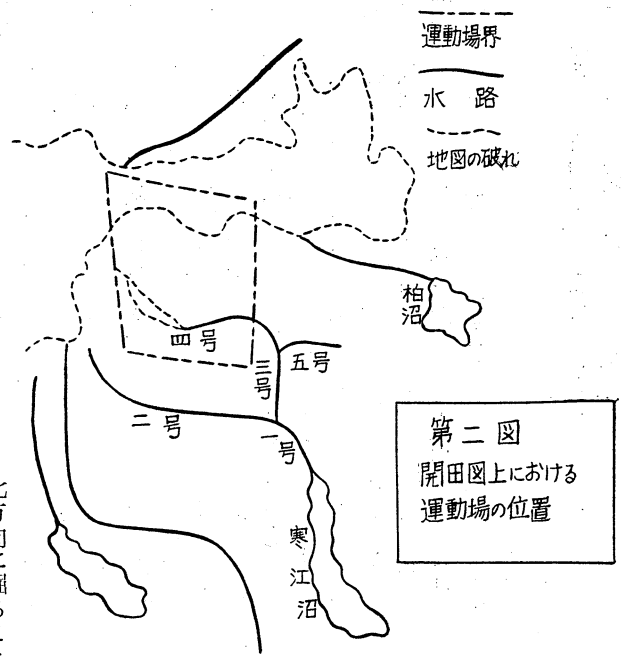
二

この調査の目的および意義は次のとおりである。越前国道守荘は奈良時代における東大寺荘園の遺跡である。しかも当時の開田図が現在正倉院に保存されている。第一図がそれである。ただしこれは原図ではなく、史料編纂所で原図を模写したものである。私たちは原図を直接写真に撮影したものも入手しているが、これは残念ながら公表が許されていない。

荘園の遺跡は珍らしくないが、このように古い地図が保存されている例は少ない。故にこの地域を発掘して古地図の記載事項と対比すれば、古代の農業および荘園についていろいろ貴重な知識を与えてくれるのではなかろうか。それが私たちの期待であつた。ただし発掘の地点（つまり総合グラウンド予定地）は現状においても古地図においても田んぼのまん中であるから、寺院や人家の遺跡の発掘と異なり、興味ある遺物が多数出土してくることは予想されない。私たちが目標として考えたことは、（一）古地図にある用水路を確認し、それにより古地図と現状の位置とを正確に関連付けること、（二）用水路の杭、田のあぜ板、偶然遺棄された農具等が発見されるかも知れないことなどであつた。なお総合グラウンドの埋立に使用する土を採取するため、道守荘遺跡の中にある下山をくず予定であるので、附帯的調査として、下山の古墳の発掘も行なうことにした。

そこで私たちがせねばならなかつた第一の仕事は、現在の総合グラウンド予定地が古地図のどの部分に当るか、なるべく正確な位置を推定することである。この仕事は九月下旬主として地理学班の大西青二氏が当つた。古地図にある生江川、味間川の形は、現在の足羽川、日野川とほとんど同じであるので、およその見当はつくが、地図の上の一センチのズレは現地では数百米の差になつてしまう。それに古地図の山は絵で描いてあるから、位置判定にはあまり正確な材料にならない。古地図の方位も正確に南北であるかどうかも不明である。いろいろな事情を考慮し、ほぼ第二図に示すような位置にグラウンド予定地を比定した。

この比定に大過がなければ、グラウンド予定地の東南部を古地図の第四号用水路がほぼ東西に流れているはずである。従つてトレンチ（試掘溝）を南北方向に掘れば、この用水路をほぼ直角に切るはずである。（用水路の番号は、便宜上この報告で私が付けたものであつて、調査団が付けたもの



第二図
開田図上における
運動場の位置

た。用水路が存在すると推定される地域を南北方向に一メートルおきに大地比抵抗を測定し、その結果、ほぼ水路らしい落ちこみがあることが判明した。（このときの電気探査線は第三図の番号1のトレンチの東にある線である。）

これらの準備調査に基づき、トレンチの位置を、グラウンド予定地の東南部、推定される用水路にほぼ直角に、はば二メートル、長さ五〇メートル、南北方向に掘ることに定めた。昭和三十七年十月七日和島誠一氏の指揮のもとに発掘が始まつた。（ついでながら、発掘人夫として旧社村地区の各村落から、割当で出動してもらつた。ここに感謝の意を表する。）

第一日目、地上から八〇センチほどの所に用水路の跡らしい灰黒色の粘土層のくぼみに到達した。第三日目、地上から一七〇センチの所に、横たわつている木材が姿を現わした。

その後の発掘経過を詳述することは省略する。概要だけを述べれば、用水路にそつて発掘区を拡張し、（第三図1、2）、また用水路の延長を確認するため補助的トレンチ（第三図3ないし8）を掘つた。発掘には人力だけは不十分なので土木機械（クラムシェル）を用い能率をあげた。このほか七台のベルトコンベヤー、二基の排水ポンプを使用した。

グラウンド予定地は九万坪にも及ぶ広い地域なので、直接発掘した地域以外の部分については要所要所に電気探査とボーリングを行ない、更に北部に一カ所念のためトレンチを掘つてみた。（第三図9）またグラウンド予定地外の私有地についても、所有者の承諾を得て、ボーリングを行なつた。（ボーリング及び電気探査の場所は第三図参照）

次に出土した杭や木材については、その材種の判別は東京大学に、放射性炭素による年代測定は学習院大学に依頼して調査し、また土壌については、化学分析を福井

でない。グラウンド予定地付近の水路を五つの部分に区分して、番号を付けた。第二図参照）

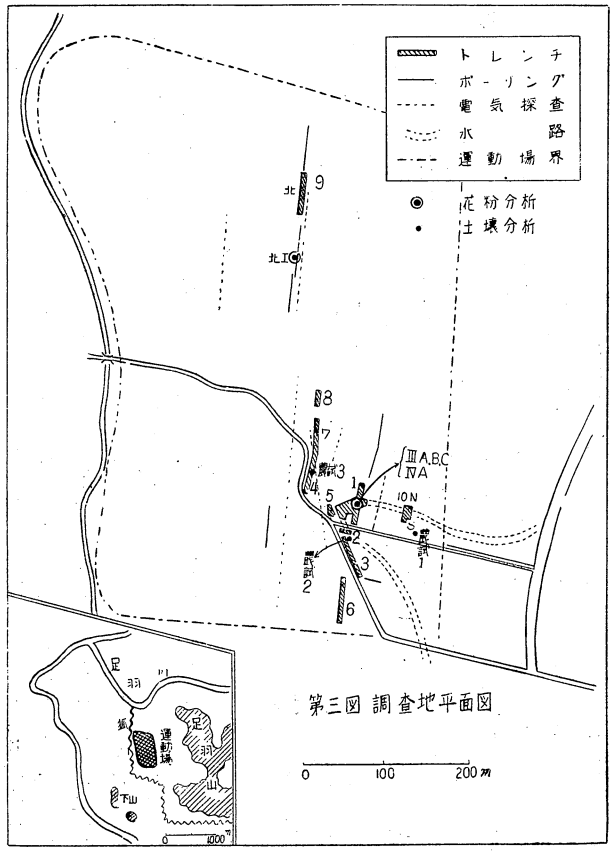
次にこの地図上の推定を裏付けるため、十月三日から電気探査を行なつた。これは地学班の笹島貞雄氏および三浦静氏が当つ

県農事試験場に、花粉分析を金沢大学に依頼して調査した。

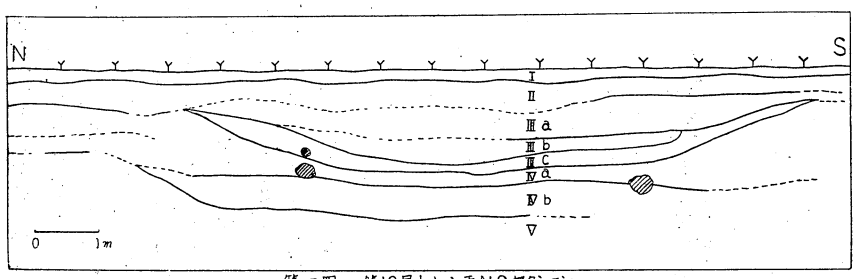
現場における発掘作業は十一月六日をもつて一応終了した。その後一部分のボーリングを続行したほか、福井、東京、名古屋等を会場にして、調査委員の研究集会を数回開いている。

三

約一か月余の発掘調査の成果はどのよう



第三図 調査地平面図



第四図　第10号トレンチNSセクション

なものであつたか。

一、地層。水路跡と思われる地点における堆積層は五層に区分できる。（第四図参照）第Ⅰ層は耕作土層（ほぼ一〇センチ）、第Ⅱ層は斑鉄層（ほぼ三〇センチ）で、地表面に平行な粘土層である。第Ⅲ層は帯状のくぼ地（切口はレンズ状）を形成しており（深い所でほぼ八〇センチ）私たちが初め用水路の跡ではないかと考えた部分である。第Ⅲ層は更にa、b、c層に細分できる。一番下のc層は腐植質の黒泥である。またb、c層にはヨシ、アシ類の茎が見られる。第Ⅳ層はほぼ八〇センチの堆積層で、更にa、b層に細分できる。a層は灰白色粘土、b層は帯青色の細砂からなつている。b層は流木、くるみの実、種子を含んでおり、b層の最上部から弥生式の土器（復元しうる壺）が発見された。a層にはイネの毛根が含まれており、木材も発見されている。またa、b層には垂直に杭が打ち込まれている。第Ⅴ層は微砂粘土層であり、基層と考えられる。第Ⅴ層は北の方では微高地になつている。

花粉分析によると第Ⅲc層と第Ⅳa層との間には、花相にかなりの変化がある。また土壌分析によれば、第Ⅳa層上部および第Ⅳb層の上端に相当する部に炭素と窒素の集積する部位が見られ、古い耕作面ではないかと推定される。特にⅣa層にはイネの毛根が含まれているから、第Ⅳa層上部に古い水田面が存在したと考えられる。

放射性炭素による年代測定によれば、第Ⅳa層に含まれていた木材はほぼ一四六五年前、第Ⅳa層に打込れていた杭はほぼ一五七五年前、第Ⅳb層に打込れていた杭はほぼ一八五〇年であつた。この年代はいずれもプラスマイナス一〇〇年程度の誤差があるものとされている。

これらの調査結果から推定すれば、第Ⅳb層上端は弥生時代、第Ⅳa層上端は古墳時代にあたるのではなかろうか。

二、水路。発掘開始当初第四号用水路であろうと推定した帯状のくぼ地は、その後の発掘によれば、第三図のような状態になつていて、明らかに開田図にある用水路と異なる。この水路らしきものは、北岸は急であるが、南岸はゆるい傾斜であり、はばはほぼ一〇メートル、高さは深い所で八〇センチほどである。前述の第Ⅲ層に当る。北岸にそつて三本の杭が点在していた。この水路は第1号トレンチの付近で急激に曲つて、南の方へ向きを変えている。

発掘された水路らしきものが、古地図の水路と全く異なるならば、古地図の水路はどうなつたのであろうか。第三図に示してあるごとく、第1号トレンチ以外に数か所トレンチ、ボーリング、電気探査を行なつて、他に水路らしいものがないか探したのであるが、調査の範囲では発見できなかつた。とすれば、古い開田図そのままの水路網が地下に眠つているという甘い予想はすつかりはずれたわけである。このくい違いをどのように解釈すべきであるか。今後の研究課題である。

（付記。この「概要」の第三章および第三、第四図は調査団から文部省に提出した報告書および文化財保護委員会に提出した報告書による。）